

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520221

研究課題名（和文）観客論的視点から見た英国ルネサンス演劇のマルチプル・プロット構造の研究

研究課題名（英文）A Study of the Multiple Plot Structure of English Renaissance Drama in Terms of Audience Involvement in the Drama

研究代表者

田中 一隆（TANAKA KAZUTAKA）

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：10227126

研究成果の概要（和文）：

本研究は、英国ルネサンス演劇に特徴的な、一つの劇に複数の筋が共存するいわゆる「多元的プロット」の存在意義を、おもに観客の観劇意識に訴える作者の配慮の一環と捉えることによって解明しようとする研究である。具体的には、ロバート・グリーン（Robert Greene）の『修道僧ベイコンとバンゲイ』（*Friar Bacon and Friar Bungay*）とヘンリー・メドウォール（Henry Medwall）の『フルゲンスとルークレース』（*Fulgens and Lucre*s）を対象に研究を行った。

その結果、グリーン『修道僧ベイコンとバンゲイ』においては、“state”の概念が多元的プロット構造の結節点になっていること、さらにこの“state”概念は、大学、国家、身分という複合的な意味を担ってこと、等の新知見を得た。後者の『フルゲンスとルークレース』においては、観客の現実世界と劇の虚構世界との間に明確な境界線が設定されず、虚構世界の問題は観客の現実の「いま・ここ」と密接な関係性を保ち得るといふ観劇意識が「多元的プロット」生成の核に存在し、この意識は“pageant”の概念に集約されていること、等の新知見を得た。

研究成果の概要（英文）：

This study focuses upon the multiple structure of English Renaissance Drama in which two or more different plots are presented in a play. This study explores the raison d'être of the multiple structure in analyzing the two English Renaissance Drama, Robert Greene's *Friar Bacon and Friar Bungay* and Henry Medwall's *Fulgens and Lucre*s by paying close attention to the linguistic texture of the plays. This research reveals (1) that in Greene's play the idea of *state* provides the focus point in which several seemingly desperate plots of the play are meaningfully interconnected and (2) that in *Fulgens and Lucre*s side action of A, B, and Ancilla who are also real servants of John Morton, serves not only as a kind of comic relief but also as a “pageant” in which the theme of the primary action of the play is represented in vulgar situations in everyday life of English people.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英国ルネサンス演劇、多元的プロット、劇場と観客、『修道僧ペイコンとバンゲイ』、"state" (大学、国家、身分)、『フルゲンスとルークレース』、世界劇場、"pageant"

1. 研究開始当初の背景

申請者が本研究の着想に至った背景としては、『エリザベス朝演劇事典』(外山滋比古監修、みすず書房、原稿提出済み)に携わった折に、数多くの英国ルネサンス演劇の筋を丹念に追ってみて筋が分裂している作品が多いという事実に気づいたことが挙げられる。これらの作品においては、複数の筋が時には劇の最後までまったく噛み合わずに展開し、表面上は作品の構造的な統一がまったく見られない作品も存在している。これらの作品は、その分裂した構造のために失敗作と見なされて、国内、国外を問わず、ほとんどともに議論されていないのが現状である。

しかし、このような作品を、筋の有機的な構成の観点からではなく、使われている言葉や表現の細かい側面に着目してみると、複数のプロットの分裂に統一的な視点を提供する言葉や概念が存在している場合がきわめて多いのである。このような言葉や概念を手がかりにして、複数の筋を多面的・総合的に受容することができたのは当時の観客だけである。当時の劇作家は、観客が批判的な複眼的な視点を通して複数の筋の構成を解釈することができるような仕組みを組織しようとしていたと考えられるのである。

かかる知見は、申請者がこれまで行って来た研究の成果、具体的には、『シェイクスピア一世紀を超えて』(日本シェイクスピア協会編協会創立40周年記念論文集)、『文学の文化研究』(川口喬一編著、研究社)、『観客論的視点から見た英国ルネサンス演劇のマルチプル・プロット構造の研究』(文部科学省科学研究費補助金報告書)、「*The Changeling*」の中の changeling と change—ダブル・プロット再考」(弘前大学人文学部『人文社会論叢』)、「*The Tempest*」のダブル・プロット—colonialism or pastoralism」(弘前大学人文学部『人文社会論叢』)、「Caliban のすばらしい新世界—*The Tempest*」における Caliban 表象について」(*Otsuka Review* (大塚英文学会))、「因果論を超える次元—イギリス・ルネサンス演劇における<マルチプル・プロット>再考

(2): Thomas Heywood の *A Woman Killed with Kindness* を中心として」(弘前大学人文学部『人文社会論叢』)、「イギリス・ルネサンス演劇における<マルチプル・プロット>再考(1)—Shakespeare と Thomas Heywood を中心として」(弘前大学人文学部

『文経論叢』)等ですでに公表されている。

例えば、これらの研究成果の一つとして、トマス・ミドルトン、ウィリアム・ローリー合作の『チェンジリング』(*The Changeling*)では、「チェンジリング」(「交換」)、「取り替え子」(「ハイパリッジという修辞法」)という概念が多義的に関与して、観客に複眼的な視点を提供していることが解明された。このように、マルチプル・プロット現象の謎を解く手がかりが幾つか発見されているのにもかかわらず、申請者のこれまでの研究成果は、この現象について網羅的に扱ったものではなく、実証的な研究としてその成果は部分的なものに止まっている。本研究は、これまでの研究成果を基に、さらに多くの作品を視野に入れることによって、実証的な研究の精度をさらに高度化しようとするものである。

2. 研究の目的

英国ルネサンス演劇には、一つの演劇の中に複数の筋が共存する「マルチプル・プロット」構造を持つ劇が多いが、本研究はこの構造について、受容者である観客の観点から考察することを目的とする。従来の研究は、この構造を主に作品の内的な関連性の観点から考察してきたが、筋の有機的関連から見ると分裂としか言いようのない作品が数多く存在する理由を適切に説明することができなかった。本研究は、従来の研究には見られない観客論的な視点から考察することによって、複数の筋の分裂的な共存に一定の合理性と必然性を賦与しようとするものである。

本研究は、英国ルネサンス演劇の多様な側面の中でも特に「マルチプル・プロット構造」に焦点を当て、この現象を当時の観客の演劇受容との関連において研究し、以下の3点について、英国ルネサンス演劇と当時の観客に関する一次資料を参照することによって、実証的に検証しようとするものである。

(1) イギリス・ルネサンス演劇のサブ・プロットは、純粋な虚構世界であるメイン・プロットとは区別された、観客の日常的現実世界に意味ある関連を持った仮構世界の一部であったこと。

(2) サブ・プロットは、当時の観客の虚構受容を日常的現実の準拠で支える劇場の演劇の必須の一部であったこと。

(3) サブ・プロットは、純粋な虚構世界を展開させる近代劇の観客から見れば全く意

味のないように見えるが、なぜ英国ルネサンス演劇の観客は、近代劇の観客とは異なる視点において演劇を受容していたのか解明すること。

3. 研究の方法

申請者の現有設備の中には、「英国ルネサンス演劇」に関する一次資料が（過去に受けた科学研究費補助金や福原賞等によって部分的には整備されたが）網羅的なかたちではまだ存在しないので、整備されていない一次資料を整備しなければならない。また、本研究のような比較的新しい研究が学会によって正当に評価されるためには、従来の研究との接点あるいは相違点を明確にし、従来の研究と本研究の関連を主張しておかなければならないが、このためには、研究対象に関係するある程度の二次資料も購入・整備しなければならない。

すでに整備されている資料と新しく整備する一次資料について、データ・ベース化による精読を行うことによって、主に次の7項目について、個々の作品ごとに抽出し、分析を行う。

- (1) 「サブ・プロット」と「メイン・プロット」の関係
- (2) 演劇構造の側面から見た「マルチプル・プロット構造」の諸特質
- (3) 「マルチプル・プロット構造」を形成する言語表象の諸特質
- (4) 観客の演劇受容の背景的意識や知識
- (5) 「マルチプル・プロット構造」が観客の演劇受容に与える影響の諸相
- (6) 近代劇とは異なる、イギリス・ルネサンスの観客の受容意識
- (7) 英国ルネサンス演劇の独特な受容意識が形成された理由

さらに、抽出された諸事実を、個々の事例を超えたより抽象化された観点から考察することによって、英国ルネサンス演劇における「マルチプル・プロット構造」の存在意義を、より一般化された視点から説明することが研究計画である。

4. 研究成果

本研究は、英国ルネサンス演劇に特徴的な、一つの劇に複数の筋が共存するいわゆる「多元的プロット」の存在意義を、おもに観客の観劇意識に訴える作者の配慮の一環と捉えることによって解明しようとする研究である。具体的には、ロバート・グリーン (Robert Greene) の『修道僧ベイコンとバンゲイ』 (*Friar Bacon and Friar Bungay*) とヘンリー・メドウォール (Henry Medwall) の『フルゲンスとルークレース』 (*Fulgens and Lucres*) を対象に研究を行った。その結果、

グリーン『修道僧ベイコンとバンゲイ』においては、“state”の概念が多元的プロット構造の結節点になっていること、さらにこの“state”概念は、大学、国家、身分という複合的な意味を担ってこと、等の新知見を得た。後者の『フルゲンスとルークレース』においては、観客の現実世界と劇の虚構世界との間に明確な境界線が設定されず、虚構世界の問題は観客の現実の「いま・ここ」と密接な関係性を保ち得るという観劇意識が「多元的プロット」生成の核に存在し、この意識は“pageant”の概念に集約されていること、等の新知見を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 田中一隆、「シェイクスピア作品はなぜ時空を超えるのか—視覚的イメージによって構成されるシェイクスピアの世界」、『図書新聞』、査読無し、2994号、2010年、4頁

[学会発表] (計2件)

- ① 田中一隆、「Henry Medwall の *Fulgens and Lucres*—劇構造の観点から」、第85回日本英文学会全国大会、2013年5月26日、東北大学川内キャンパス
- ② 田中一隆、「イギリス・ルネサンス演劇のマルチプル・プロット—ロバート・グリーン『ベイコンとバンゲイ』の state を巡って」、第83回日本英文学会全国大会、2011年5月22日、北九州市立大学北方キャンパス

[図書] (計1件)

- ① TANAKA, Kazutaka et al., Faculty of Humanities, Hirosaki University, *Archaeology of Intellectual Aspects of European Culture: A Volume of Articles Based on the Project of International Collaborative Research*, 2012年3月31日, pp. 77-92.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 一隆 (TANAKA KAZUTAKA)
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：10227126

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：